

〔花き類の新品種導入および品種改良〕
プリムラ・オブコニカ ‘プリミンフリー種’ の開花・生育特性

吉岡孝行
(園芸部)

【要 約】オブコニカは、開花および生育にプリミン保有の有無が大きく関係し、フリー種はプリミン種に対して草勢が弱い。

【目 的】

オブコニカの品種は、プリミン保有の有無に関心が高まっているが、プリミンフリー種（フリー種と略）の生育特性は明らかになっていない。そこで、フリー種がもつ開花および生育特性を明らかに、プリミン保有が生育に与える影響を検討する。

【方 法】

供試品種としてフリー種に‘F₁プリノーシリーズ、F₁タッチ・ミーシリーズ’、対象にプリミン保有種（以下プリミン種と略）‘F₁ジュノーシリーズ’を供試した。4月3日、市販の播種用土を用いて288穴セルトレイに1穴1粒を播いた。6月4日、3号ポットに鉢上げし、9月11日、5号鉢に定植した。鉢用土は赤土：腐葉土：ピートモス＝4：4：2の体積割合に混合し、元肥に窒素：リン酸：カリ＝0.4g：1.38g：0.4g/Lを混用した。10月1日、古葉を除去後、アクラタ顆粒水和剤2,000倍液を散布した。11月15日より最低夜温を12℃に設定し、定植後は底面給水皿のひも給水とした。供試株数10株。開花期の生育および開花状況を調べた。

【成果の概要】

- 1) 観賞期における1ヶ月間の株張り・展開葉数・開花数・花茎数の増減を図1に示した。株張りでプリミン種が1.3～3.8cm増加したのに対し、フリー種は最大の‘ブルー’で1.2cmと少なく、他2品種は減少した。この傾向は、展開葉数でも認め、プリミン種の増加量には品種間の違いが現れたが、フリー種は最大の‘ホワイト’で9.4枚増えただけで、他2品種は減少した。開花数の増減には、プリミン保有の有無が最も顕著に現れた。フリー種の開花数には、増減の変化がほとんど見られなかったのに対して、プリミン種は‘オレンジ’35輪‘レッド&ホワイトバイカラー’25輪などの増加を認めた。これに対して花茎数は、プリミン保有の有無の差が現れなかった（図1）。
- 2) フリー種の‘F₁タッチ・ミーレッド&ホワイトバイカラー’は、供試した全ての株でモザイク病を罹病して萎縮してしまい、未開花で終わった。これに対して、保有種で同じバイカラー種である‘F₁ジュノーレッド&ホワイト’は軟腐病2株、モザイク病1株を発生したものの、調査終了時の開花株率は89%、34輪の開花数を見た（図2）。
- 3) オレンジ種の開花株率は80%以上と高かったが、‘F₁ジュノーオレンジ’が経時変化で後半まで開花数を増やしたのに対して、‘F₁プリノーオレンジ’は毎回の調査で2輪以下の開花数であった（図2）。モザイク病はフリー種2株に対して保有種は1株のみであった。
- 4) 以上の結果、オブコニカは開花および生育にプリミン保有の有無が大きく関係し、フリー種はプリミン種に対して草勢が弱い傾向を認めた。

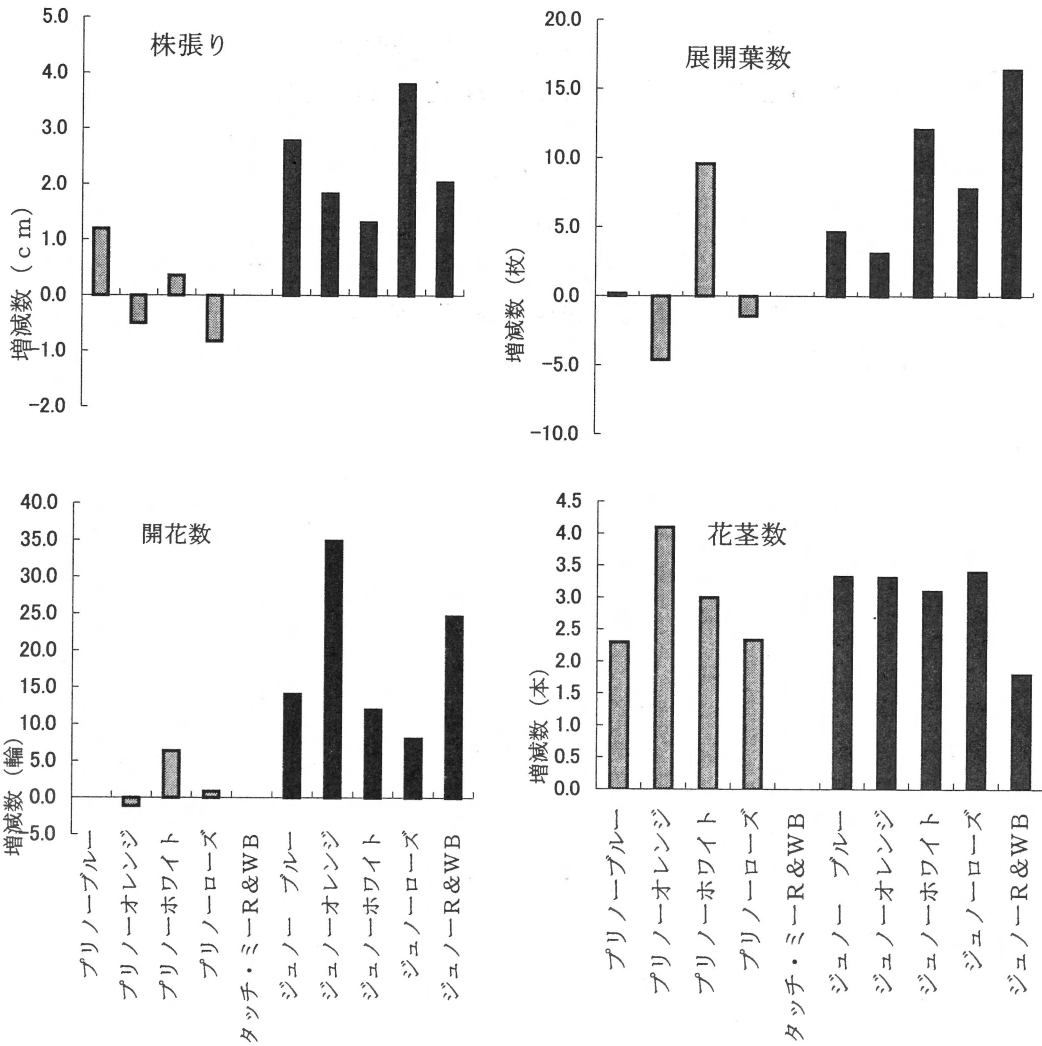


図1 観賞期における一ヶ月間の株張り・展開葉数・開花数・花茎数の増減調査：12月13日～1月12日

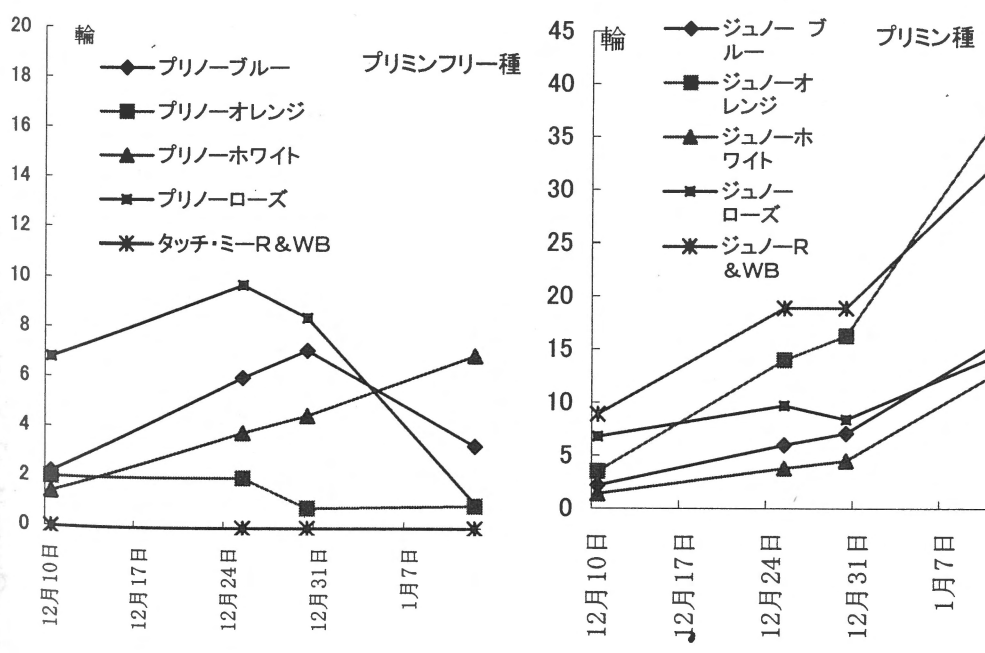


図2 プリミンフリー種とプリミン種の開花数の経時変化